

## 綱曳～西原町我謝の大綱曳の事例～

宮平 真由美<sup>1)</sup>

A Note on the Tug-of-war Festival in Gaja, Nishihara-cho, Okinawa.

Mayumi MIYAHIRA<sup>1)</sup>

### はじめに

綱引きは、稲作の盛んな東アジア地域をはじめ世界中で行われている。日本でも各地で行われていたようだが、その多くが消失し、現在では九州・沖縄に多く見られる程度である。

沖縄県内では、年中行事として南部を中心に各地で行われており、その数は約175ヶ所（2004年1月現在）<sup>①</sup>を数える。

本稿で取り上げる西原町我謝の大綱曳については、『沖縄の綱引き習俗調査報告書』<sup>②</sup>でも詳しく紹介されているが、本稿では、聞き取り調査で得られた戦前・戦後の綱曳の資料も併せて報告する。

### 沖縄の綱引き

沖縄の綱引きは、農耕儀礼のひとつとして五穀豊穣、卜占、害虫駆除、雨乞い等の祈願としての意味を持つと云われている。その由来として、①南山王が中国からとりいれた、②畠に捨てた老人より害虫駆除方として綱引きを習ったという敬老思想的なもの、③収量勝負としてやったという伝承、④ハブ防止のためにやったという伝承、⑤夫の航海安全帰省を乞うた願ほどき、⑥雨乞いなどがあげられる。

綱を引く時期は稲の収穫の終える旧暦6月～7月に多く見られ、特に旧暦6月25日に綱を引くところが多い。（先に上げた数字の37.7%）

材料は主として藁であるが、宮古島のようにキャーン（シイノキカズラ）やマーニ（クロツグ）など藁以外の材料で綱を作る地域もみられる。綱引き当日、または数日かけてシマ（字・村）の男性陣が大綱を作り、地域を二分してシマの人々が引き合う。

綱引きは、上・下、または東・西などに分かれて行われるところが多いが、出自（血縁）などで組分けがなされるところもみられる。

綱は二本（雌雄）作り、道ジュネーをして綱引き場に運び、そこでカナチ部分（綱頭）にカナチ棒を入れ、引き合うのが主流である。ただし、宮古島のように雌雄ともに一番綱、二番綱があり、それをカナチ棒で繋いで一本にし、その繋ぎ合わせた雌雄の綱を寄せてカナチで繋ぎ、引き合うところもある。

綱の形は、①手綱はない、②手綱がある、③カナチの後ろの方で手綱が数本に分かれる（蛸綱）などがある。

また、ほとんどの地域では綱引きには旗頭が2～4本出て、ガーエーをして士気を高める。地域によっては、綱引きを終えた後に、沖縄角力などをするところもみられる。

戦後、藁の入手困難や人手不足から綱引きをしなくなった（出来なくなった）地域や綱からロープになった地域もある。一方、糸満市真壁のように一旦途絶えていた綱引きを復活（1975年）させたところもみられる。

### 我謝の綱曳（ガージャジナ）

西原町我謝の大綱曳は五穀豊穣、無病息災を祈念し行われている。その歴史は古く、約400年の伝統があるといわれているが、裏付ける文献資料はなく、口碑伝承となっている。

西原町は琉球王国時代の西原間切にあたり、王府の直轄領として現在の那覇市首里辺りまであった。かつて西原の平野は、西原ターブックワと呼ばれ、

1) 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

田が多くあったことから藁も比較的多く取れた地域でもあった。

我謝では年に2回、青年会や有志で組織された実行委員会（12名）を中心に、ウマチ一綱とウファチ綱が行われる。又、我謝では「綱引き」ではなく、「綱曳」と書く。

以下、項目毎に記述する。

#### ・由来

西原町我謝の大綱曳の由来は次の通りである。その昔、我謝の創始となる根屋（ニーヤー）といわれる上神座（屋号：イーカンザ）の二人の兄弟が、我謝一帯の農地を二分して耕作していた。そこで収穫した稻の量を競い合っていたが、なかなか勝敗がつかず、それではその収穫した稻藁で作った綱を引いて勝敗をつけようということになった。兄がリンゴー与（雄綱）、弟がウフカ一与（雌綱）に分かれて綱を引いたのが、綱曳の始まりだと言い伝えられている。

その際、兄（リンゴー・雄綱）の農地を耕作する人はリンゴー側を、弟（ウフカ一・雌綱）の農地を耕作する人はウフカ一の綱を作り曳いた。

#### ・双分組織

我謝の綱曳の組分けの名称は独特で、由来にあるリンゴー（雄綱）、ウフカ一（雌綱）で呼ばれる。（以下、雄綱をリンゴー、雌綱をウフカ一と記述する。）

戦前までは綱を曳くところは門中などによって決まっていた。リンゴー与は上神座、新上神座、次男上神座などの親戚筋、ウフカ一与は前神座、前仲座の一門であった。だが、住民の増加などで均衡が保てなくなつたため、約40年前に集落の班分け（1～6班）に合わせ、1～3班はウフカ一、4～6班はリンゴーと分かれて引くようになった。

現在は8班まであり、おおよそで1～4班はウフカ一、5～8はリンゴーに分けられている。又、地理的に、ウフカ一は下割（シチャワリ）、リンゴーは上割（イーワリ）とも呼ばれる。

#### ・期日

綱は、旧暦の6月15日のウマチ一綱（こども綱）と旧暦6月25日のウファチ綱（大綱）の2回曳く。

かつてウファチ綱は、旧6月25日の当日に綱を作

り曳いていたが、平日だと綱を作る参加者が少なく難しくなってきたため、現在では旧6月25日を過ぎた次の日曜日にチナウチ（綱作り）と綱曳を行っている。

ウマチ一綱は、現在でも旧6月15日の夕方にウファチ綱を一回り小さくした綱で行われている。その際、綱打ちは旧の6月15日前の日曜日に実行委員中心に綱打ちを行う。

#### ・材料収集

現在では綱曳が近づくと、青年会が我謝集落の各戸を回って寄付を募り、企業などからの寄付も合わせて綱の代金を含む運営費に充てている。現在は金武町伊芸区と契約し1200坪分（2011年）の藁を綱曳の2～3週間前に、実行委員会がトラックで購入に行く。

戦前にはすでに稻作をしている家が少なく、ほとんどの家が隣町の与那原の材木屋などでヤンバルから船で運ばれてくる藁を購入していた様である。藁は、各戸15歳以上の男子に課せられ、ウマチ一綱の時に1束、ウファチ綱の時に1束と計2束の分担があった。移民などで現在家にいない人の分まで出さなければならなかつた。また、綱を調べる係があり、束が小さいと再度購入しなければならなかつた。

戦後、与那原で藁を購入することが困難になってきたため、集落で北部の方から購入するようになつた。その後、1960年前後の2、3年間は島尻郡知念村から購入し、約45年前から継続して金武町伊芸区から購入している。

ウフカ一の旗頭の飾りの材料であるクービ（ツルグミ）は、綱曳の約2ヶ月前に青年会がヤンバルに取りに行く。

#### ・チナウチ（綱打ち・綱作り）

チナウチは、リンゴーは、マカーガー付近、ウフカ一は我謝児童公園内で行なつてている。ウフカ一は、15、6年前までは、ウフダラムイ付近で作っていたが、綱を作る際に必要な大きな木や木陰がなくなった事もあり現在の場所に移つた。しかし、綱置き場はウフダラムイなので、現在でも仕上がつた綱はトラックで公園からウフダラムイまで運ぶ。

ウフダラムイは、戦前、松の木等があり、住民の

休みどころでもあったというが、戦後米軍によって壊されたようである。

我謝では、基礎になる細い綱のことをエイヤーといふ。その呼称は綱を縫う際に「エイヤーさの、エイ！エイ！エイ！」と声をかける所からきているといわれる。エイヤーは3人1組になって行い、水で濡らしたクーユーイ<sup>②</sup>を継ぎ足しながら縫っていく（写真1）。エイヤーは、雌雄とも14本つくる。胴綱を8本（17間）、ティーンナ（手綱）を6本（7間4本、6間2本）である。この他にも、カナチ綱をつくる。

エイヤーが仕上がるときには、胴綱になるエイヤーをねじり合わせてミーチャーシ（三つ綱）を2本、ターチャーシ（二つ綱）を1本作る。これらの作業は、ほぼ全員で行なわれる。綱をねじる担当2名に、タイミングを取るドラ担当1名、よりをかける為に綱を転がす作業を他の30名程で担当する（写真2）。

出来上がった胴綱3本で本綱を作る。本綱は中央から二つに折り曲げてカナチ部分（綱頭）をつくり、綱の長さを9間<sup>③</sup>に調節して形を整える（写真3・4）。長さの調整が済むと、細い縄で間隔をおいて縛り、ティーンナは首口から2間ほどあけてから、6ヶ所に均等に配置する。

我謝のカナチ部分は大きくは作らない。リンゴーはカナチ棒が入る程度、ウフカーオもリンゴーが入る程度に輪を作る。そのため、カナチ部分にはムドウシと呼ばれるものがある（写真5）。

ウフカーオのカナチ部分はリンゴーのサイズを測らずに、男性が腰に手を当てた大きさで作られる。そのため、もし綱を寄せたときにリンゴーが入らなかつた場合は、ムドウシを切って、カナチ部分を広げる。しかし、実際にムドウシを切る事は殆どなく、1930年以降切った事はない。（それ以前は未確認）

戦後しばらくまでは、2日がかりで大綱を作っていた。（戦後からは、1日で仕上げたという方もいる）初日に作った綱は綱打ち場に置き、その晩の見張り担当は相手方に綱を切られたりしないように見張っていたという。

2日がかりで仕上げる綱は現在よりも大きく、雌雄とも長さが13間（現在は9間位）ほどあり、綱曳場いっぱいに使用していた様である。



写真1 エイヤーを縫う

#### ・大綱曳の流れ（2011年7月31日開催）

2011年7月31日（日）

- |       |   |
|-------|---|
| 6:00  | 藁の分配（青年会・実行委員会）   |
| 7:00  | 綱づくりの呼びかけ（実行委員会）  |
| 8:00  | エイヤー作り開始  |
| 11:00 | エイヤー作り終了（ウフカーオ）<br>カナチ綱作り<br>ワラシビー <sup>④</sup> は<br>引き続き作業（ウフカーオ）      |
| 11:30 | ミーチャーシ・ターチャーシ作り（ウフカーオ）  |
| 11:50 | ミーチャーシ・ターチャーシ作り（リンゴー）   |
| 15:30 | リンゴー作業終了  |
| 16:30 | ウフカーオ作業終了<br>→ ウフダラムイ付近に綱を移動  |
| 18:00 | 殿（トゥン）に拝む<br>チナヒチモーイ開始  |
| 18:40 | 出発前に、それぞれの役割分担を確認。  |
| 18:45 | 綱曳場に向かって道ジュネー   |
| 18:50 | チナヒチモーイ・メーモーイ<br>マチガーエー（マチガーエー）   |
| 19:00 | 途中支度を乗せ、綱曳き場に到着   |
| 19:08 | 綱を寄せ始める（一回目の綱曳）<br>リンゴー（雄綱）の勝利  |
| 19:22 | 綱を戻し、リンゴー与の旗頭の舞い<br>遅れてウフカーオ与も旗頭を出す。<br>綱を寄せ始める（二回目の綱曳）<br>ウフカーオ（雌綱）の勝利 |
| 19:45 | 綱を戻し、ウフカーオ与の旗頭の舞い<br>遅れてリンゴー与の旗頭を出す。<br>綱が南風原町宮城に引き渡される<br>(売却)         |
| 19:46 | 旗頭の片づけ  |

※筆者が見学した時間・工程を記載。

2011年8月1日（月）

19:00 ハーメーユーレー（婦人会）



写真2 ミチャーシ・タチャーシを作る



写真6 リンゴーのカナチ綱



写真3 カナチを作る① (リンゴー)

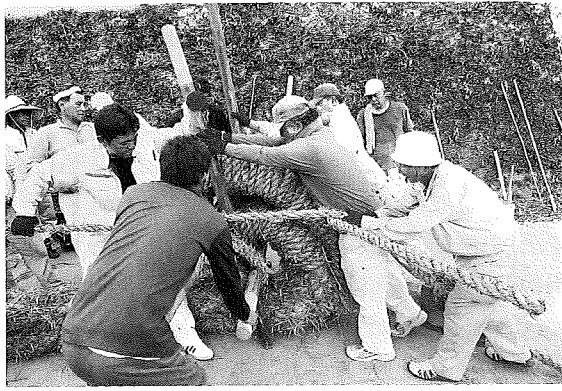


写真7 カナチを作る (リンゴー)



写真4 カナチを作る② (ウフカー)



写真8 出番待ちの綱 (リンゴー)



写真5 ウフカーのムドゥシ部分

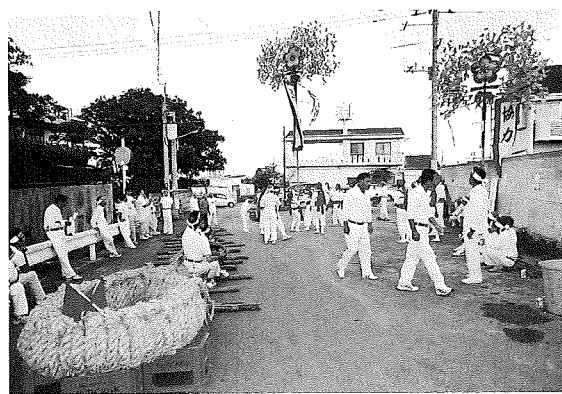


写真9 出番待ちの綱 (ウフカー)

### ・ガージャマチ（我謝巻き）

我謝の綱の特徴といえばカナチ部分を飾る巻き方がガージャマチである。現在では聞かなくなつたが、戦後しばらくまでは「マグマチ」と呼んでいた。

ガージャマチの巻き方は独特で綺麗なことで知られ、与那原や他の地域にも影響を与えている。

チナウチの際にもカナチ部分のカナチ綱を作るのはベテランが担当し、片手でつかめる程度に細く均一になつてゐる。長さはウフカーのものは約100mほどである。リンゴーのカナチ綱の長さの測り方は独特で、出来上がつた綱を地面に渦巻状に巻いていく（写真6）。長くなるにつれ、まるで円形の敷物の様になる。その直径が1間半あれば充分足りるといふ。

ガージャマチの巻き方は、最初にカナチ綱のほぼ真ん中の長さの所で曲げて輪を作る。次にカナチの前に来る部分にカナチ綱の輪をあて、輪に綱を通しカナチに縛る（図1の①）。後は左右に緩くガージャマチをし、カンジ<sup>⑥</sup>を整えながら最終的に木樋などで叩きながら、しっかりと締めながら仕上げていく。カンジを配する場所は両綱で異なる。ウフカーは上にくる部分、リンゴーは正面にくる部分である（写真8・9）。図1にガージャマチの巻き方を記した。

### ・綱曳の挙み

綱曳の前には我謝の殿に挙む。ビンシーを持ち、区長、実行委員会、青年会のメンバーが参加し、これから行う綱曳の報告と五穀豊穣、区民の健康を祈願し、挙む。

現在、殿は集落の北西側にあり、3つの殿（上之殿、中之殿、下之殿）が合祀されている。

戦前までは、我謝ムイと呼ばれる森（丘）があり、その頂上付近に上之殿、中腹に中之殿、現在の場所に下之殿があつた。

戦後、我謝ムイの宅地造成により、現在の場所に合祀されることになった。（図2）この場所は、もともと獅子屋（シーシヤー）<sup>⑥</sup>があつたところもある。

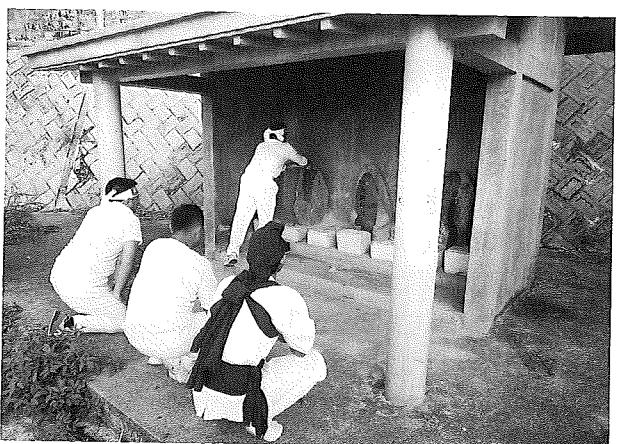


写真10 殿にて挙む

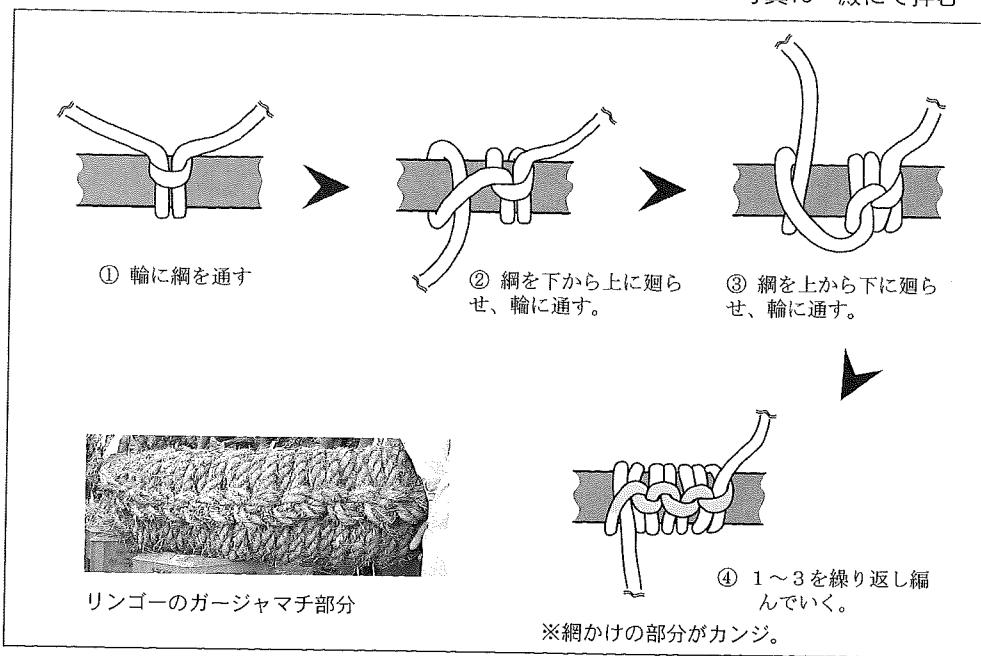


図1 ガージャマチの巻き方

#### ・支度

綱置き場から道ジュニーをし、曳く前の定位置に付くと一旦綱を下ろす。

時間になると綱を担ぎ、両綱とも綱曳場へ寄せていく。綱を寄せる際にカナチから2間あたりの所から綱の上には歴史上の人物に扮した3名の支度が乗る。

戦前までは、綱も大きかったこともあり、15~16歳位の青年が乗っていたという。その頃の支度には「浦島太郎」や「扇の的の那須与一」などもあったという。戦後も「姉妹仇討ち」などがあるが（写真15）、1980年頃以降は、下記の通りである。

戦後に小学校3~4年生の男児が乗る様になり、現在はリンゴーは「謝名之大主」の旗、ウフカーハーは「久志之若按司」の書かれた旗の持ち手の後方に按司や供のものが続く。

#### ・綱曳

我謝の綱の寄せ方は独特で、「我謝の綱曳のカナチグチ（綱を寄せる様）だけ見られたらそれで良い。」と云われるほどであったという。

まず、綱曳に先立って、マチガーエーが行われる。4本の旗頭が出て鼓舞するように舞い、六尺棒や三尺棒を持った青年らが円を描きながら背中を合わせて声を上げ、士気を高めていく。ガーエーが終わると旗を端に寄せ、いよいよ綱曳である。

置いてあった綱を持ち上げ、「ハーイヤ！」「ハーイヤ！」と声を発しながら綱曳場の中央に互いの綱を寄せていく。しかし、すぐに繋ぐのではない。リンゴーは、リンゴー側から見てウフカーハーの左側に寄せ（写真11）、続けて右側へ寄せた後、再度左側へ寄せる。それは、ウフカーハーが腹を見せるのを恥じらい、なかなか上に向かないからだという。その後、綱を合わせカナチ棒が入れられる。カナチ棒が入った瞬間に綱の引き合いが始まる。綱の上にいた支度はすぐに飛び降り、その場から離れる。

綱は二回曳かれるが、最初が本勝負である。二度勝つという事はほとんどない。

我謝の綱曳は戦前からスニンズナ（衆人綱）なので、集落以外の人も誰でも曳くことが出来る。戦前は、字小那覇の綱引きが終わったあと我謝の綱曳を行っていたため、小那覇の綱引きを見て、我謝の綱



写真11 綱を合わせる

曳を見る人もいたという。夕暮れ時になるので琉球竹で数本の松明を作り、照らしていたという。

#### ・旗頭と垂旗

綱曳に欠かせないものの一つに旗頭がある。旗頭は、リンゴーが菊、ウフカーハーが梅の花を模し、大小4本ある。大きい方を「青年旗」、小さいほうを「高校生旗」と呼んでいる。

戦前までは2本であったが、戦後に高校生旗を作っている。しかし、一時期高校生旗は途絶えたが、その後、約45年前に復活して現在の4本になった。

垂旗は、リンゴーの青年旗は「養氣」、高校生旗は「和衷」で、ウフカーハーの青年旗は「平和」、高校生旗は「協力」である。ウフカーハーの青年旗の垂旗は、「歌舞」（戦前）から「年有」（1947年頃造り替え）、そして1961年頃に「平和」に変わっている。

旗頭の材料は、現在に至るまでに竹（戦前）からベニヤ（戦後しばらくしてから）、発砲スチロール（1992年頃～現在）と変遷を経ている（写真12）。また、竿の長さも戦前は3間（約5.4m）ほどあったというが、現在は約2.6間（4.73m）である。高校生旗は3.75m。軽くすることで、腰への負担も減り持ち易くなるのだろう。

また、リンゴーの菊の葉も現在は左右合わせて10枚だが、戦後しばらくまでは14～16枚ほどあり、菊も一回り大きかったという（写真16・17）。

旗頭の制作は現在青年会が行なっているが、戦前は平良順保氏が制作し、戦後1950年までは小川良成

氏から指導を受けながら青年会も参加して制作していた。

聞き取りによると、戦前から我謝の旗頭には灯を入れなかつたようである。(入れたと話す方もいる)

以前は、テークドゥールーの下から2本の紐を下ろして持ち手のバランスを取っていたが、現在は旗の持ち手以外に旗のバランスを取るものは何もなく、各旗の担当の5名で交互に持ちながら舞う。戦前～1960年前後まで旗持ちは2～3名だったという。

道ジュネーでは、旗頭を先頭に(旗頭は担いで移動)道を練り歩き、綱曳場付近まで寄せる。そして支度を綱に乗せると、今度は旗頭を立てて持ち、少しづつ綱曳場へと移動していく。

相手と対面すると綱を一旦下ろす。ドラやボラ、鉦鼓が鳴り響くなか綱曳場の広場で旗頭が舞い、青年らが六尺棒、三尺棒などを持ってそれぞれの与に分かれて背を合わせ円を描いて廻るマチガ一イが行われると、会場の雰囲気は最高潮へ達する。

1回目の勝負で勝った時には、勝った側の旗頭が先に出て、花吹雪を散らせながら勝利を祝い、続いて負けた側の旗が出る。勝った側の青年らはガ

エーをして勝利の歓喜を挙げる。2回目の勝負の際も同様である。

#### ・チナヒチモーイとメーモーイ

大綱曳の大部分は男性が中心に行なわれるが、婦人達は、綱曳の約1時間前からリンゴーとウフカ一に分かれて綱曳場の両端に円陣を組み、チヂンを打ち鳴らし歌い踊る(チナヒチモーイ・綱曳舞い)。

婦人達によって歌われる歌には、「アーガーリー」「ポンポン」「スンサーミー」がある。

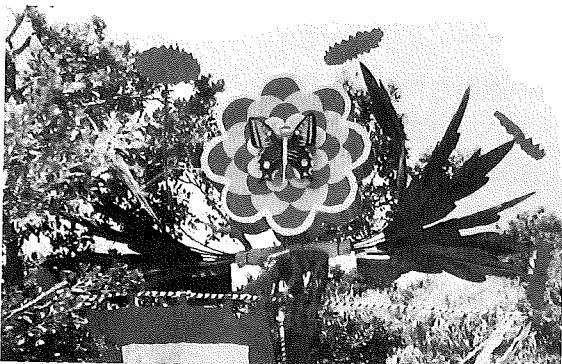
「アーガーリー」と「ポンポン」はチナヒチモーイで歌い踊られる歌で、「スンサーミー」は綱曳が終わり、帰路に帰る時に歌われる歌で、この歌には踊りは無い。

綱が道ジュネーをしながら運ばれてくると、婦人達は歌い踊るのを止め、綱の方へ近づき、チヂンを打ち鳴らし「ハーイヨ」と声を出しながら少しづつ後退し、綱を綱曳場へ導く(写真14)。これをメーモーイといふ。

戦前は、婦人達は一番良い着物を着て綱曳に参加したという。聞き取りで得られた話では、その方の



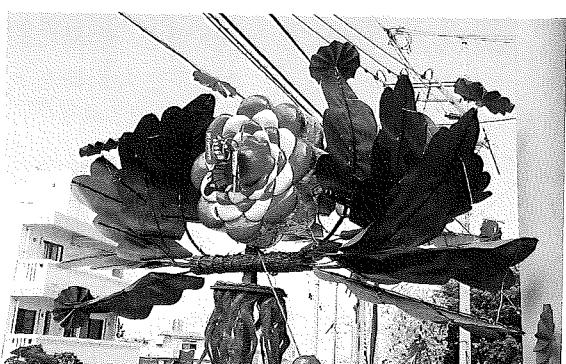
ベニヤ製の旗頭（ウフカ一） 1991年 (写真提供：我謝自治会)



ベニヤ製の旗頭（リンゴー） 1991年 (写真提供：我謝自治会)



旗頭 現在の旗頭（ウフカ一） 2011年  
写真12



現在の旗頭（リンゴー） 2011年

祖母は、一番上等の薄手のクンジ（紺地）の着物を着て頭には赤いティサージ（帯あげ）を巻いて参加していたという。

#### ・ハーメーユーレー

我謝では綱曳の翌日までが一連の行事である。翌日は、婦人達によるハーメーユーレー（婦人たちの慰労会）がリンゴー与とウフカー与合同で公民館にて行われる。そこでは、綱曳歌も歌われ、歌の伝承の役目も担っている様である。

女性が中心であるが、区長や実行委員会のメンバーなどが招待され、綱を売買した代金の一部が食事などの経費に当てられる。

戦前までは、ハーメーユーレーの日に婦人ら数名が青年会長の家を訪ね、チヂンを叩き慶き歌を歌い家にカリー（縁起）を付けて青年会から経費を貰つたという。

また、今の様に合同で行うのではなく、それぞれの与に分かれて、新築の家や大きな家で行っていた。

だが、終戦直後は、青年会も経費がなく、参加者で会費を出して行ったという。

#### 村綱

村の綱引きについて貴重な話を聞く事が出来たので、ここで記しておきたい。

1937年に西原村を挙げての綱引きが我謝馬場で行われた。馬場はとても広く、道の両側にはクワディーサー（モモタマナ）が広く枝を広げ、木陰を作っていたという。

その当時は24字あり、我謝と小那覇が中心となって綱を作ったという。カナチ部分は我謝が担当し、ガージャマチで飾った。その時に作られた綱は大綱だったらしく、肩に担ぐことが出来ず、容易に動かす事ともできなかったので、綱の下に丸太棒を入れたという。よほど大きい綱だったのだろう。

現在、馬場は存在しないが、町内の東側を南北に走る国道329号線の旧試験場跡地辺りにあったという。

18世紀後半頃に製作されたといわれる琉球国惣絵図一間切集成図（写真13）の西原間切を見てみると、我謝村、与那城村近くに馬場が描かれており、それが1937年に綱引きを行った綱引き場ではないかと推

測される。

1937年は日中戦争が始まった年で、西原村から始めて徴兵で戦場へ出兵する約40名は来賓席に座り、綱引きを観戦したという。

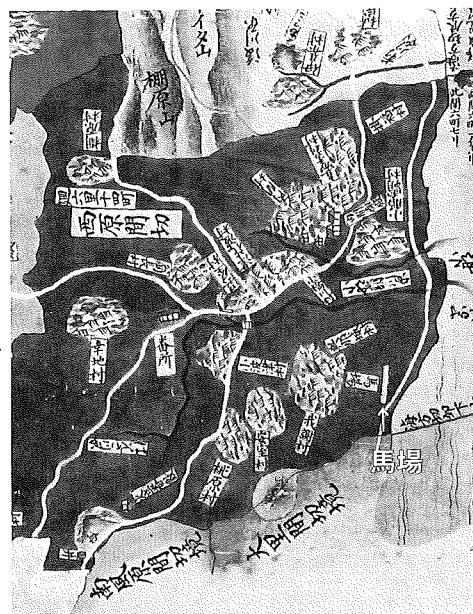


写真13 琉球国惣絵図（間切集成図）（一部加筆）

#### おわりに

我謝の大綱曳について述べてきたが、400年余の伝統ある行事も時代と共に、現在の社会生活に合わせて変化しながら引き継がれている事が伺える。しかし、その精神文化は変わることなく受け継がれている。

この社会の変化の激しい時代だからこそ、先人から受け継がれてきた歴史・文化を記録として残し、また継続してその伝統を継続していくことを強く願う。

しかし、今回の調査では充分ではないため、今後も更に調査をする必要があると感じた。

また、1947年頃に作った垂旗は、平良幸市氏<sup>⑦</sup>が書の上手い人を呼んで書いてもらったという情報を得る事が出来た。その名に沖縄三筆といわれる謝花雲石、山城正忠が上がったが、残念ながら確定するには至らなかった。

聞き取り調査では、城間勝弘氏（85歳）、城間ハルミ氏（85歳）、城間英助氏（95歳）、平良昌助氏（91歳）、小橋川賢一氏（84歳）、宮平政子氏（89歳）、宮

## 〈綱曳の歌〉

「アーガーリー」(一部抜粋)

スユウティンザナシ  
ムムタマディチャマディ  
ウーマンチュヌマジリ  
ウガディシデラ  
(首里の大王様  
百歳まで長生きしてください  
みんなで お祈りしましょう)

イシナグヌイシヌ  
ウフシナルマディン  
ウーカキブセミソリ  
ウガディシデイラ  
(小さい石が  
大きな岩になるまで  
長生きしてください  
みんなで お祈りしましょう)

チンヌヌメガナシ  
ヌイミセルウンマ  
チミヤアヤヂミヌ  
マクラカンヂ  
(金殿内のヌメガナシの  
お乗りになっている御馬  
蹄はあやなす爪で  
鬚は枕のように美しい)

「ボンボン」(一部抜粋)

チナンマカサビティ  
ウディンマカサビティ  
ウシヌカールガルガルトゥ  
シディワカラ  
(綱引きも勝ったし  
腕も勝ちました  
牛皮の太鼓を軽々とたたいて  
遊びましょう)

カリユシヌアシビ  
ウツハチティアラヤ  
ユムアキティティンドマ  
アガルマディン

(かりゆしの遊びで  
心うち解けて  
夜も明けて朝日の上るまで  
遊びふける)

マチカニティスタル  
六月ンナトイ  
カニンウイルキサミ  
カナシトウシギワ  
(待ちに待った  
六月が来た  
親しい友よ  
なんと嬉しいことか)

「スンサーミー」(一部抜粋)

クトウシチュクタルメーヤ  
アンチュラサコカティ  
スンサーミー スンサーミー ユイユイ  
(今年植えた稻は こんなによく実ったのだ)

ニシヌカジフキワ  
ニシムアブシマクラ  
スンサーミー スンサーミー ユイユイ  
(北風が吹けば 北の畦をまくらにする)

ヘースカジフキワ  
ヘースアブシマクラ  
スンサーミー スンサーミー ユイユイ  
(南風が吹けば 南の畦をまくらにする)



写真14 綱を迎える

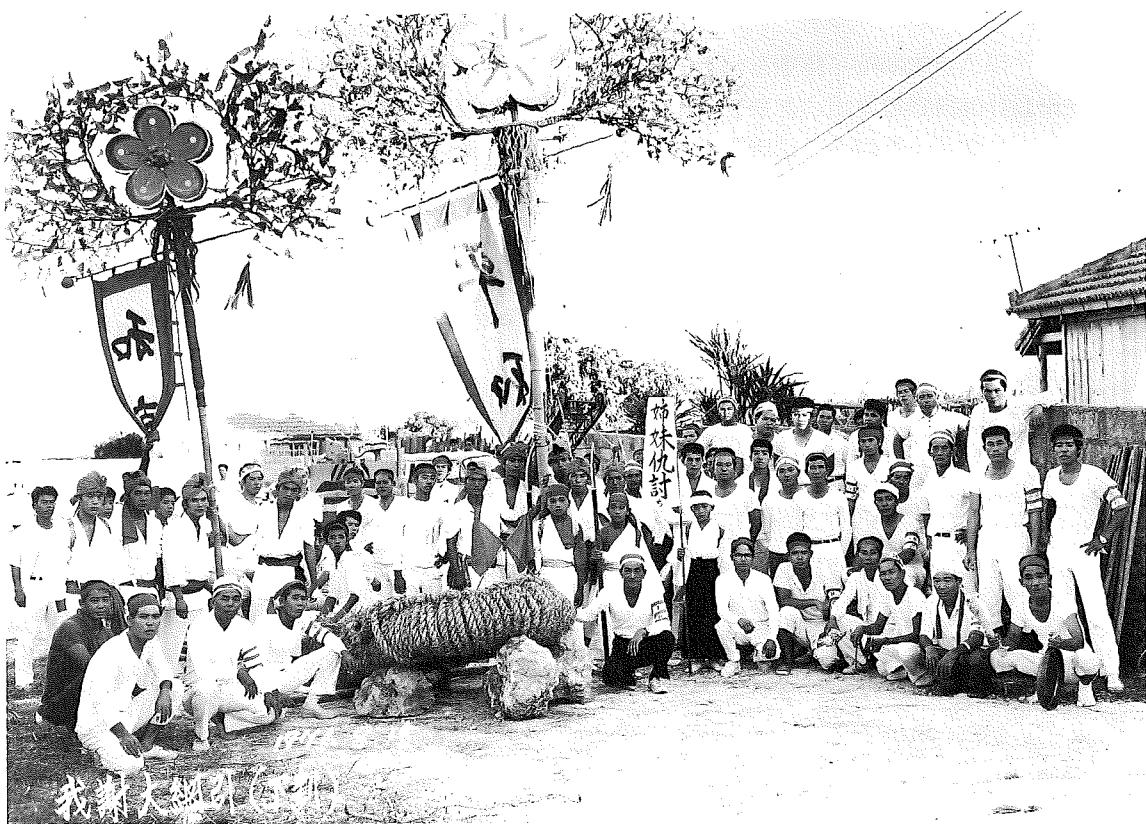


写真15 ウフカーチ集合写真（ウフダラムイにて）1971年 (写真提供：城間勝弘氏)



写真16 リンゴー集合写真（マカーガー前にて）1971年 (写真提供：城間勝弘氏)

平正輝氏（69歳）、小橋川赳（64歳）、平良知二氏（66歳）から、貴重な話を聞く事が出来た。また、我謝の公民館では過去の記録や綱曳歌を拝見・複写させていただいた。垂旗の書に関しては、親泊元高氏よりご教示をいただいた。記して謝意を申し上げる。

## 註

- ①『沖縄の綱引き習俗調査報告書』「沖縄の綱引き行事の分布（市町村別）」より、○△を行なっている地域として数えた。
- ②エイヤーに継ぎ足していく藁束のこと。かつては、一握り程の束に束ねていた。（現在は束ねていない。）
- ③1間（けん）=6尺=1.8182m
- ④ワラの余分な葉を取り除く作業
- ⑤カナチ部分の飾り巻きの部分
- ⑥我謝には獅子舞も年中行事の一つとして残っており、かつて獅子を保管する建て物があった。現在は公民館に保管。

- ⑦第2代沖縄県知事。西原町我謝出身。

## 参考文献

- 1 沖縄県 文化財調査報告書143集『沖縄の綱引き習俗調査報告書』沖縄県教育委員会 平成16年3月
- 2 平敷令治「沖縄の綱引」『沖縄の祭祀と信仰』1990年
- 3 西原町史編集委員会『西原町史 第四巻 資料編三 西原の民俗』西原町役場 1989年
- 4 佐藤善五郎「綱引、そのエロスの世界」『青い海』No.58 青い海出版社 1976年
- 5 崎原恒新「原始信仰とエロチシズム」『青い海』No.58 青い海出版社 1976年
- 6 宮平正史『九州・南西諸島における綱曳き行事の形態と組織～我謝大綱曳きを事例に～』中京大学社会学部卒業論文 平成10年
- 7 沖縄古語大辞典編集委員会編 角川書店『沖縄古語大辞典』 平成7年
- 8 沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』 1983年

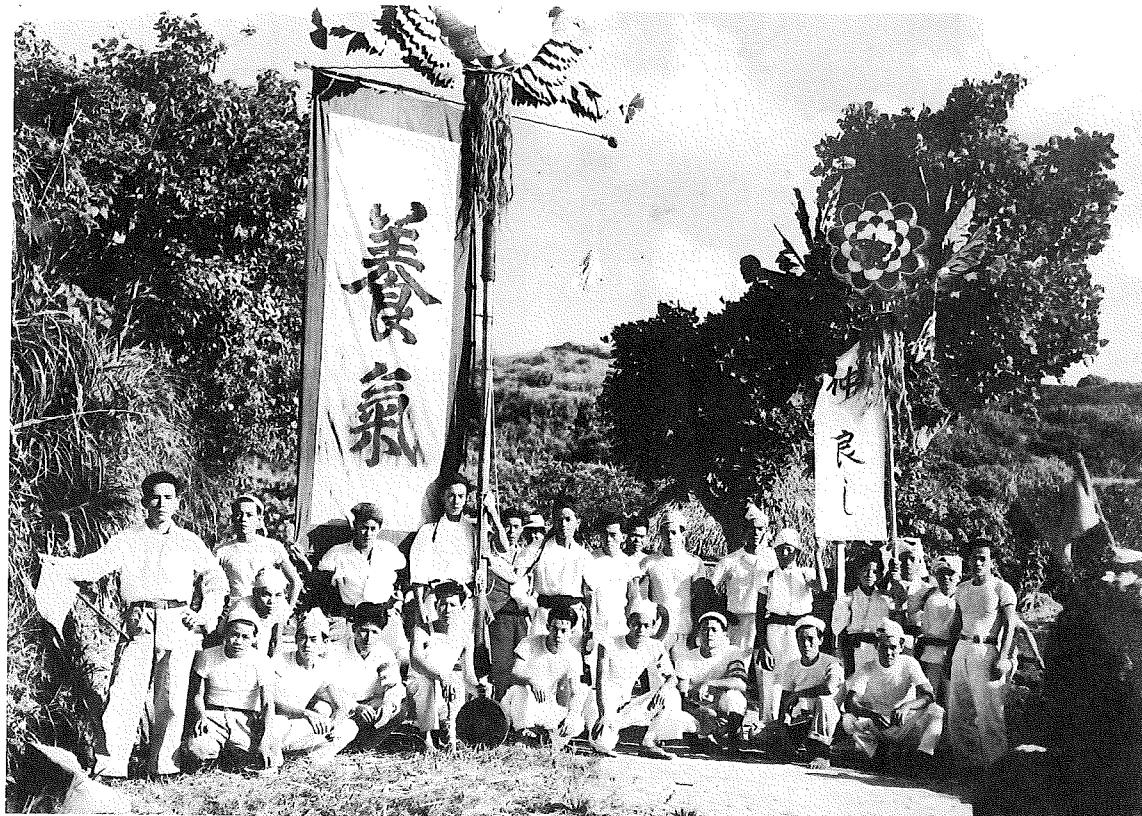


写真17 リンゴー集合写真（マカーガー上の道にて）1947年頃 （写真提供：小橋川赳氏）

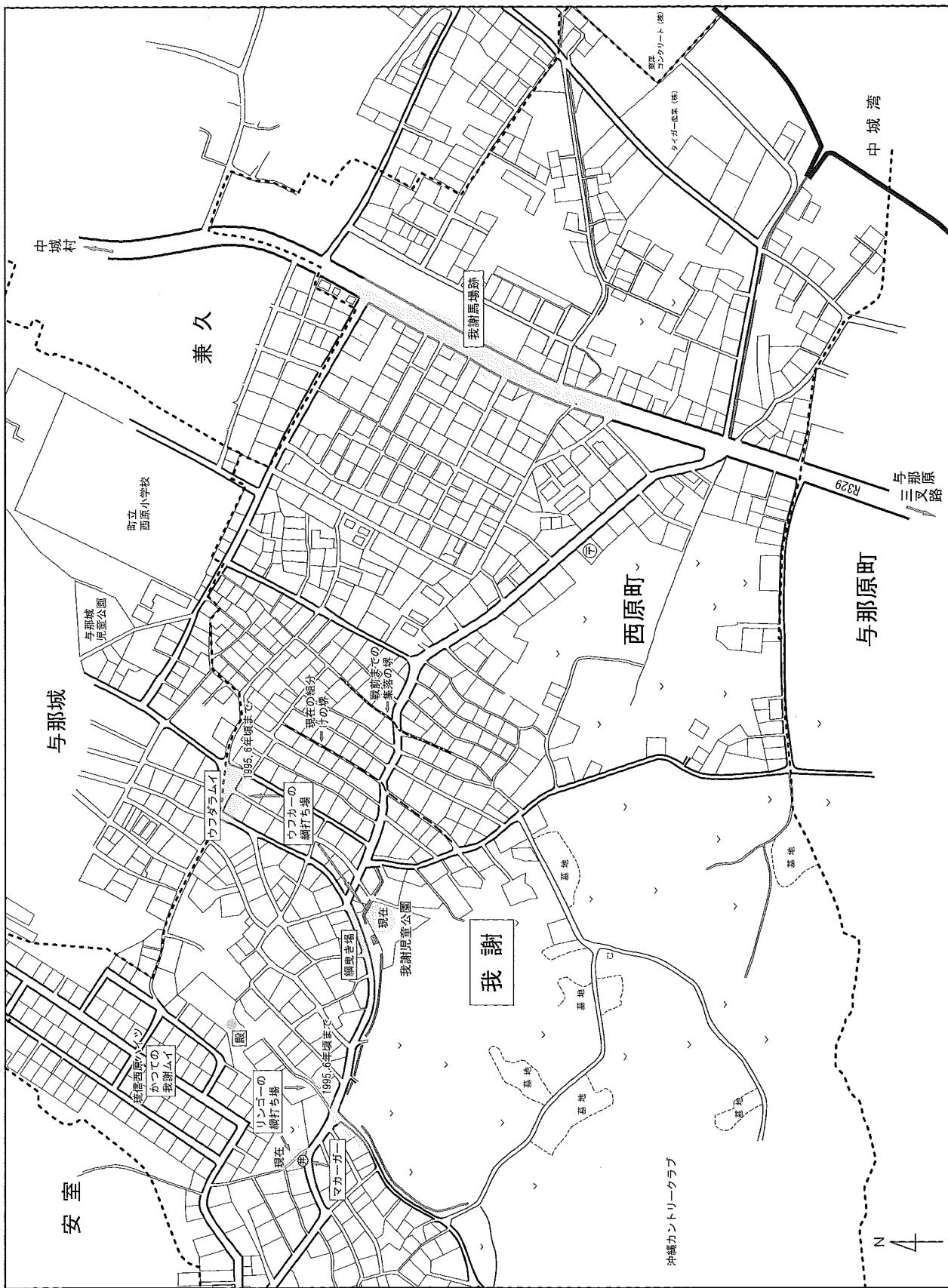


図2 我謝集落図（1998年の地図に加筆）